

絆で結ばれる町 鳥取からの挑戦（知事講演）
平成22年度鳥取市民生児童委員協議会全体研修

日 時 平成22年10月14日（木）13:00～14:00
会 場 とりぎん文化会館 小ホール
主 催 鳥取市民生児童委員協議会

皆さまこんにちは。本日は平成22年度の市の民生児童委員の研修会、このように本当に盛大に開催されたことをお祝い申し上げたいと思います。森美都会長さん、あるいは皆さまそれぞれ日々大変なご苦勞をされておられることと、私も常々大変だなど、感謝と敬意を表させていただきたい気持ちで今日は参りました。

ただいま松井部長さんの方から丁寧ご紹介をいただき、大変恐縮をいたしておりますが、9月18日が誕生日だということで、私の方が誕生日が早いとおっしゃいましたけども、齡はたぶんあちらの方がちょっと上かなと思っておりますが、ちなみに9月18日は私の結婚記念日でございます。このたび9月17日で齡を一つとりまして、わたしもだんだんと歳を重ねて今49になりまして、ええ、早いものでございます。生まれたのはもう半世紀前でございます。よくよく読んでみるとですね、家族ですけれども、お父さんは49歳になって始終臭いとか言われまして、まあそげに言わんでも加齢臭があるかしらんけど、というようなことでやっております。

余計なことを申しましたけれども、今日はですね、皆さまの日頃のご活動がいかにか地域としてこれから大切なのか、そんなことを、これからの鳥取県の発展と絡めてお話を申し上げたいという風に思っています。

今、鳥取県、だんだんと話題が多くなって参りました。例えば、つい先だってはですね10月3日の深夜、日本時間でいうと10月4日の朝、というか未明でありますけれども家に12時40分ですか、電話がかかって参りまして。鳥取を含む山陰海岸が世界ジオパークネットワークに加盟したということでございまして。わあ、すごいなど。

ここ三年ぐらい頑張っって、だいぶ努力しました。正直挫折もありまして、一回は蹴飛ばされたんですね、残念ながら。まあ、ただそれは、雨降って地固まるだったか

なと思います。その後ですね、地域の力が結集したと思ったんです。

たとえば、その時ジオパークの委員会の皆さんからお聞きしております。何が足りなかったかなということで、お伺いしています。まず、学術研究が足りなかった。確かに山陰海岸、鳥取砂丘が素晴らしいってことは皆さん分かっているわけでありまして、じゃあそれが地質年代的にどういう風に位置づけるのかということだったり、例えば10万年の歴史だとかそういうことなんですけども、その辺も体系がまだできてなかった。それで学者の先生たちに集まっていたきまして、兵庫県、京都はもちろんであります、鳥取県を含めまして、学者でネットワークを組んで、こういう風に整理をしましょうと、まあ色分けをしたり、色んなことをやりました。

こうやって学術研究を進めまして、さらに地域の皆さんのボランティアガイドとか一生懸命やってもらわなきゃいけないと。そうやって、ジオツアーというんですけども、利活用のことだとか、地域とのつながりのことをしっかりやって。教育のこともそうであります。このへんは役所ではどうしようもないことでありまして、住民の皆さんの参加と、色々な団体が協力をして、ずいぶん進みました。

例えば松島遊覧さんなんかございますけれども、その後ですね、小さな船まで仕立てまして、従来ですと千貫松島がありますが、あの岩の間なんかくぐることなんて考えられなかったんですけど、今は小さな船で下を通れるようになっていましてですね。そんな様なツアーを考えたり。またジオガイドを養成して、本当にボランティアの皆さんが増えました。向こうから、ギリシャからはニコラス・ゾウロスさんという方が来られて、それから北アイルランドからはパトリック・マッキーバーさんという方が来られて、視察をされました。何に感動したかっていうと、こういう地元の住民の皆さんがジオパークのことを理解していると、このことが素晴らしいと言っていました。それからボランティアのガイドの方がですね、紹介をされる時にこういうふうにおっしゃったそうです。地質のことはもちろんお話はされるんですけども、例えば女性の団体とかですね、興味がありそうだったらお花の話をします。子供たちの団体だったらこんな

ような話をします、というふうに相手によって使い分けながら説明をしてるんです、というような話を聞いて、これはすごいなと思われたそうです。こういうように1年間、日を暮らしましたが、この間地域の団結が深まったという感じがいたしました。

それから先だってはですね、アテナという韓国ドラマがございまして、皆さまご案内かもしれませんが、アイリスというTBS、毎日放送系で、この辺だとBS山陰放送が水曜の夜9時からのアクションドラマがあります。韓国版007でございまして、大変なものです。アクションシーンがあるんですね。

私どもは韓国ドラマ、韓流ドラマのつもりで、ずいぶん最初、誘致活動を色んなところに仕掛けていたんですけども、来られたのが向こうでも視聴率40%ぐらいとる大変なものです。ちなみに、この間、終盤を迎えて終わったゲゲゲの女房であります、だいたいあれが20%ぐらいの視聴率ですから、40%っていったら紅白みたいなものでありまして、大変な視聴率を韓国でとった人気番組です。

その後継番組を作ろうということで、スタッフが来られたんですね。最初はどうも鳥取県の誘致があるから、まあ、一応審査も合格したし、ちょっと撮ってやるかというぐらいだそうでありますけども、その後地域でもだいぶ熱心に色々な説明をしたり、私自身も出かけてずいぶん社長さんにもお会いしましたけれども、当初の計画の三倍ぐらい撮ることになりました。

12月から韓国で放送されることになります。どういう番組になるかってのが楽しみなわけありますけども、あんまり喋ると叱られますが、やっぱりすごいですね。本当はアイリスですと、イ・ピョンホンが主演だったんです。だから、そういう韓流スターがいっぱい来るわけあります、今回のドラマはチョン・ウンソンさんという方で。日本でいうと福山雅治さんみたいな人気スターなんです。だから龍馬伝が来るみたいなものですね。それからスエさんとか、イ・ジャさんという、これも人気、一流の女優さんです、それからキム・ミンジョンさんというですね、この人は歌手で有名だった人がタレントになったっていう堺正章さんみたいな方ですね。とても楽しい方ですけども。それからBOAさんっていう

日本でもコンサートやったり紅白に出たと思いますが、歌手もおられまして、このへんで撮影をしたわけですね。

全部秘密裏にやっておりましたので、みんな黙っているんですけども、本当は大変だったんです。アクションドラマをやりまして、韓流スターがやってきて韓流ドラマを撮るというイメージがあったんですね。冬のソナタとか。そうするとラブシーンに良さそうな、鳥取砂丘ですとか用意したらいいのかなという感じだったんですが、アイリスというドラマが日本で放映されるようになって、見させてもらいましたけれども、爆破シーンはあるわ、銃撃シーンはあるわで大変なことであります。それをです、ね鳥取でやるというわけです。この平和な町で。

色んなシーンがありましたけれども、どうせあれですけども、あんまり言うと叱られますけれども、例えばこの若桜街道、若桜通りでもロケされていました。ここをそぞろ歩きさせていました。あるカフェの方にも入って撮影しています。それから鳥取砂丘。鳥取砂丘ではサンドボードとかあいう今風のスポーツも絡めながらですね、これはBOAさんが撮影にあたっていました。

ただ難しかったのはですね、色んな協力を得なくてはいけないんです。というのも、交通整理はもちろん要ります。どこでバレルんでしょうね、よく分らないですけども、今インターネットっていう元気なものがあるからかもしれないんですけども、みーんな黙っているんですけども韓国では全部流れちゃっているんですね。それでバレルのかかもしれないんですけども。今日はどここの通りでロケがあるらしい、という噂がどこからともなく広まって結構人が来られるんです。それで交通整理が要るというようなことがあったり。

特に難しかったのが鉄砲とか重火器でございまして。007と一緒にありますから、まあバシバシバンとマシンガンでやるんですね。これなんかも大変でございました。というのも、日本には銃刀法という法律がございまして。本人たちはですね、よその国から持ち込む予定だったみたいですけども、県警、各所に相談をいたしましたら、もし持ちこんだら逮捕すると言われました。こりゃいかんということでミニチュアを用意してやるということになったんですけども。

それから難しいのはですね、車とかカーチェイスとか

あります。黒い車を10台ほど用意してもらいたい。しかも壊してもいいやつ、とかね。そうなりますとこれは大変でありまして。これは、本当はうちの公用車でも壊してもいいのは出そうかという話をしたんですけども。こういうのに全部企業さんから協力が集まったんです。鳥取凄いなと思いました。ロケに来られた皆さんがびっくりされておられまして、これだけ地元が熱意を持って、一致団結して協力しているところってないんじゃないか、ということを言われていました。

ある町ではですね、綱引きの祭りがあるんですけども、この綱引きのお祭りが愛情を語る上でクライマックスに多分なるわけでありまして、その綱引きを季節外れでやろうということになりまして。誘致に行っている方は何でもやりますと言っているものですから、今更できないとは言いにくいのですね。それで、実際に蔓をなつて、縄を編む、もうしわいんですね、この季節になると。とてもじゃないけど大変でありました。それで綱引きをやるシーン何度も何度も撮り直すんですから、大変だったと。エキストラもいっぱいいると、そんなようなことであります。

こういうようなことでもお分かりいただけるように、ジオパークにしてもですね、それから今回の撮影もそうです。今度はまがサミットだとか、色んな行事があると思います。さらに海作りの祭典がこのたび賀露で開かれる。こんなことも全部地域の一致団結というものが求められるわけです。

海づくりの祭典も白うさぎ大使というのを今どんどん増やしています。来年は兎年ですから、因幡の白兎に会いに来てください、と岐阜の大会で私も挨拶させていただきました。なぜ白兎かと言うと、白兎は世界で初めて隠岐の島から海を渡った兎でございますので、海づくりの祭典にふさわしいだろうと言って内部を説得したんですけども。放流をしたり、山の手入れをされた方に白うさぎ大使になってもらって、来年の陛下をお迎えしたときに、みんなでそういう地域の環境づくりや海づくりを顕彰しようじゃないかと、そんなしかけなんです。まあだから、いろんな人が協力してですね、そういう行事をやっている。

【一人暮らし高齢者等の孤立・孤独】

ただ、現実の社会はどうなんでしょうか。本当に気になるニュースが最近多かったです。例えば東京の方ではですね、お年寄りが、新記録みたいなそういうお年なんですけれども、実際にいなかったという。いないと思ったら亡くなっていたという。亡くなっていただけじゃなくて、年金なんかもどこかに取られていたとかですね。一体、家族だとか地域社会というのほどこへ行ったのだろうかと思えることがとつても多くなってきたと思います。幸いですが、この鳥取市をはじめとした鳥取県では、消えた高齢者問題というのは事実上発生しませんでした。その意味では地域の絆がしっかりと、民生児童委員さんをはじめ地域の中で保たれている。そのための色んなことを努力をしていると、改革を進めている、そういうことの表れであると思います。

一人暮らしの高齢者などのですね、孤立とか孤独ということで、これは全国調査であります、内閣府の調査であります、一番上に赤で囲ってございますが、だいたい4割ぐらいの人がですね、孤独死を身近な問題として考えていると。すなわち自分がこの世から昇天したとしても、それに社会は気付かないんじゃないかな、という風を感じている人が、実に4割もいるということです。これは鳥取県内でも決して例外ではないと思います。この統計見ていただきますと、やっぱり大都市とかですね、大都市で5割近い人がそう感じていると。町村だとか小都市ですと、だいたい3割台、4割程度ということですけども。そういうように地域差はあるわけですが、これがどんどんと増えてきているわけです。

現実には鳥取県でこれからはどういう世帯構成になっていくっていうのを推計などを含めて考えてみるとですね、現在、だいたい59.7%っていう数字がありますが、高齢者の御夫婦だけ、あるいは高齢者の独居、独居老人と言われますが、こうした世帯が6割弱という数字であります。これがですね、2035年、今から四半世紀ほど経ちますと、7割ぐらいだと。独居の高齢者の世帯、これをご覧くださいますと、4割ぐらいなんです、独居高齢者の世帯が。10軒歩いてみて4軒がお年寄りが一人で住んでいると、こういう数字なんです。もちろんこれは推計でありますので、この通りにいかないように、

ももっと地域元気を取り戻して、若い人たちを増やしていくとか、それから暮らし方を色々サポートしていくということが必要だと思ふんですけども。

こうなると地域の中でどうやって防災対策をやっていけばいいか、とかですね、それから健康管理の問題だとか、買い物だとか、そういう日常の利便性をどうやって保っていったらいいのかっていうのが、鳥取県の中でも深刻になってくる場所です。この独居老人だとか夫婦のみの高齢者世帯、こういう数字というのは他県よりもさらに進行して鳥取県は先に行っているということです。地域の絆を保とうというコミュニティが守られている状況が続いているにせよ、どんどん環境は悪くなってきている、というのが今の見込みなんです。

一人暮らしの高齢者を支えるための安全安心なまちづくりをしようということで、公的サービスとして介護保険だとか、あるいは市町村のいろんな福祉事業だとか、あるいは通報システムだとか、整ってきはじめてはいます。また企業等の見守りだとかですね、インフォーマルサービスと言われるようなNPO団体だとか、民生児童委員さんだとか、そうした色々なサービス主体、こういうところで安否確認だとかいうことをやっている。鳥取県内では高齢者100歳で記念品を贈るとか色々やっておりますけれども、そういう機会でも、今回調査をいたしました、鳥取県内では大きな問題はないということになりましたけれども、皆さまが日頃歩かれている、色々な世帯を思い浮かべていただくと、さあ、さてこれから5年10年経ってこのままで大丈夫だろうかという思いをですね、皆さんは共有しておられると思います。だから鳥取県では中山間地域の見守り制度というのを始めたんですね。これは企業さんと協定を結びましてやっていく制度であります。

【民生児童委員制度の成り立ち】

民生児童委員制度の成り立ちについてちょっとお話をさせていただきます。

もともと日本というのも、そういう社会福祉の制度っていうのは昔からありました。ただやり方がだんだんと変わってきているんだと思います。と申しますのも、昔のこと、奈良時代とかですね、そういう時代までさかの

ぼっていくと、福祉の源流があると言われてます。光明皇后が作られたと言われてるわけでありまして、悲田院という施設とか、施薬院という施設とかですね、そういう施設があったと伝えられています。この悲田院というのは孤児ですね、そういう人を収容するとか世話をする施設です。それから施薬院というのは病気で弱っている方々が、自立できない方々を受け入れたという風に伝えられています。

さらにその時代ですね、行基というお坊さんがいましたけれども、行基などが始められたという伝承がございますが、布施屋というですね、一時的な収容所とか受入施設、そのようなものもございました。

伝説によれば、聖徳太子もですね、そういうことを始められたといいます。これは史実として明らかにはなっていないわけでありまして、少なくとも光明皇后とかそうした時代になると、日本でもそういう福祉制度というものができてくる。

その後だんだんと時代は下ってくるわけでありまして、基本的にはお上の施的な要素が強かったわけでありまして。ただそれのままで本当にいいのかなということですね。

長く江戸時代も含めて、「惣^{そう}」という、そういう村のつながりがありました。その中で、みんなで助け合って、いわば相互扶助のような形態で、日本というのは福祉を成り立たせていたわけですが、明治維新が過ぎて近代国家に入りますとだんだんとそういうコミュニティで封建国家が管理をするという時代から変わってくるわけです。そうすると一人ひとりの個人が独立してくる、家族制というものが引かれるわけでありまして、家長を中心とした世帯ができあがってくる。

そういういわばシステムが変わっていく中で生まれてきたのはですね、ここにある濟世顧問という、これは隣の岡山県で生まれた制度であります。それから大阪の方ではですね、方面委員というのができました。鳥取県でも後に方面委員が置かれて、この方面委員という制度が全国的な制度として発達していくわけでありまして。これらは結局民間の中ですね、色々人を支えていこうという制度作り、それが事実上どんどん発達してきたということです。

戦後になりまして、民生委員となり、さらに児童委員、今日は主任児童委員となってきましたけども、こうやって少しずつ発達をしてきたわけでありまして。基本は平安だとか律令国家の時代のような、お上からの施的なことではなくて、地域の中で有志が支えていくということ、それを制度化していったというのが民生児童委員の成り立ちということでありました。

【慈善活動・ボランティアの発展】

日本とですねヨーロッパではだいぶそのところのものが違うところがあります。ヨーロッパでも地域・地縁だとか血縁だとかそうした相互扶助というのはあるわけでありまして、日本と大きな違いがあるのはですね、やはり教会の力だとか、そういう宗教の中から福祉が支えられてきていることでもあります。

日本の場合でも、もちろん仏教思想だとかですね、それからお上からの救済というのがありましたけれども、限定的でそんなに規模は大きくないと思います。教会では、クリスマスで教会なんかに行くとお会いしますが、寄付金を入れる帽子が回ってくるわけです。ああいうような感じで常にいわば善行を行って、それによって救済されるという、宗教世界の中で作ってきました。だから、ヨーロッパの方に行きますとベルギーとかですね、もともとカトリックだとか宗教色が強いところですけども、高齢者の施設だとか、だいたい宗教法人が中心になってやっています。そうしたようなことで、社会福祉を支えるシステムが宗教の中で育ってきたところがあるんです。

それがまた近代・現代になりまして、だんだんと個人、市民レベルで行うといったようなことになってくるわけです。海外でいったら主流でござまして、ボランティアとかNPOの制度、これはいずれも海外から日本は考え方を輸入してきたようなところがあります。日本のボランティア制度なんかは、平成7年の阪神大震災が変わり目になって急速にボランティア活動が広がったと言われていて、NPOの法律ができたのもこの後のことでもあります。ですから日本ではまだ最近のことではありますが、ヨーロッパはそういう面が非常に強いわけです。

【西欧の支え合いの歴史】

中世以前では農業共同体だとかギルド、それからコミュニティの相互扶助というのがありましたが、近現代では色々な社会問題が発生して、国による色々な支援の制度ができていくわけでありまして、それと併せて右側の方にありますように、インフォーマルだとかボランティアだとかマーケット、そういう政府以外のサービスがどんどん充実してきています。

ですから1980年代以降の時期をとらえて、国際的な連帯革命だと言う風という学者もおられまして、それは先進国がどんどんと福祉国家が広がってくるわけでありまして、財政を支えきれない、そういうこともあって民間の方で市民が力をつけていますから、市民が代わりにこういうサービスを提供していこうということで立ちあがっていくと、これが先進国でどんどん起こってきた。

また、発展途上国にはですね、先進国から色々なファンドが行きます。こういうファンドが、前は政府対政府でやっていたんですけども、だんだんと今時代は変わってきて、NGOだとかそういうところにお金が回るようになった。そうやってどんどん民間レベルに資金力もできてきて、そういうところで支えているようになる。

さらに東ヨーロッパの社会主義が崩壊しました。そうしたことで国家による管理体制から解かれていくわけでありまして、そういうところで同じようなことが起こっている。

そうやって地球社会全体で連帯していくような革命が起こってきたと言われるぐらいですね、社会システムが世界的に変わってきたわけですね。日本では阪神大震災ぐらいが契機になりまして、本格化してきたという風に見ております。

【国内の支え合いの歴史】

国内では、先ほど申しましたけれども、「惣^{そう}」だとか、そうした相互扶助組織がありましたけれども、産業化に伴いまして、国家が中心とする援助が広がってきた。

戦後ですね、公共主導で、生活保護を中心に、色々な援助が行われるようになりましたけれども、それについて民生委員の役割っていうものが、この福祉の世界の中で明確に決められてきたわけでありまして。そうやって特

別公務員としての役割が定められているし、その活躍の場というものが本当に広がってきているわけであります。

そこへもってきて、今社会福祉構造改革と言われるような、介護保険サービスだとかを皮切りにしまして、従来は福祉という措置をするという立場ですね、住民の皆さんがハンディキャップを負っているとか、あるいは体のご不自由だとか、そういうことで助けを求めると。それに対して民間のサービス提供機関がサービスを提供し、そこに介護保険という形だとか、あるいは児童福祉であればそれに対する財政支援ということで公が関わっていく、そういうスタイルに変わってきております。いわば住民と行政とはそれぞれが自分の役割を果たしながら一緒になって市民生活を支えていくという風に変わってきているわけであります。民生委員の皆さまは、その中心的な役割を期待されているようになったということであります。

【育児の不安、児童虐待問題】

最近の状況を見て頂きますと、児童相談所での相談件数、全国が折れ線グラフですが、どんどん増えています。今、年間で4万4千件ということでございます。これは10年前見てもらいますと平成11年が1万1千件でありまして、実に4倍なっていますね。鳥取県もどんどん伸びてきました。16年度がピークであります。その後色々と地域のネットワークも張りながら、なんとか抑制をしております。それでも68件、昨年度はそうしたことがあったということであります。

その下に意識調査があるわけなんですけれども、親たちの世代の方々、子育て世代の意識が変わってきているんですね。そういうことで、その関係も変わってきている。左下の方をご覧くださいますと、普段自分とコミュニケーションとったりですね、子育てを支えてくれる人がいるかということにつきましては、ここにございますようにそれぞれの年齢別ということで、だいたい4割ぐらいが数名いらっしゃるということでございますけれども、ただ、いないと答える方がですね、1~2名と答える人とだいたい2割程度だとかおられるような実情があります。

それから、子育ての相談相手がいないということなん

でしょうけれども、イライラすることが多いかということに、はいと答える人は3歳児ですと半分がそういうふうに回答されているということでありまして、なかなか子育てに隘路を感じてしまっている、難しさを感じてしまって悩んでいる、そういう親たちが増えてきている実情があります。

【自治会活動の弱体化】

自治会活動であります、比較的堅調にやっているとは思いますが、鳥取市内でも加入率が低下してきているということが数字に出てきております。

それから住民活動の参加状況、町内会長さんに聞いてみたというアンケートであります、ここにございますように、なかなか若い世代だとかそういうところの参加に苦労されているという状況がございます。

【過疎地での地域力の減退】

過疎地での地域力ということですが、子育て層の人口が極めて少ないというようなことが認められ、そして高齢者世帯ですね、上の方65歳以上のところの世帯をご覧くださいますと、大変に増えてきている。明らかに世帯構成が過疎町村では従来考えられなかったような状況になってきています。

高齢化の集落の集落活動であります、右側の方、高齢化率が50%以上進んだ集落で歯、新しい集落活動に向かっていくのがなかなか難しいという状況が見て取れるわけであります。

【薄れる社会の絆】

社会の絆と書いてありますが、多くの人が人間関係が希薄になったという風に見ています。これは全国の統計でありますけれども、左側の方、人間関係が難しくなったと感じる、どちらかといえば難しいと感じるとお答えになった方がだいたい3分の2なんです。3分の2いらっしゃるということであります。

その原因として、要因としてですね、地域のつながりが薄くなっているですとか、核家族化が進んだとか、親子関係の問題だとか、いろんなところで問題意識を感じられているところです。これは皆さんが普段出会う人の

中に感じる事だと思います。

変わりゆく家族の絆、求められる新しい絆ということですが、家族の機能だとかですね、地域の意識変化などがある時に、じゃあこれからどうやって本当に一人ひとりの人が幸せに暮らせるように、我々導いていくのだろうかというところに、新しい努力が求められるということだと思います。

世帯あたりの人数が減ってきている、子どもとの同居にですね、これは決して子どもが嫌いだからということではないんですけど、子どもとは生活習慣がことなるからというのがトップに上がっていますが、要は別々の方がお互い気楽だろうということだと思います。それでいいと思いますが、そうしたら、じゃあ、それを支えるだけのですね、地域の方での結びつき、絆というのを再生させていく必要があるということだと思います。

近所付き合いの人数ということでもありますけれども、これは全国統計で鳥取よりも状況は相当悪いと思いますが、近所で生活面で協力し合う人がいないと答えた人は3分の2と、かなり多いですね。県内はこれよりはだいぶデータはいいと思いますけれども、それでもそういう状況がですね、広がってきていると思います。

下の方のグラフにありますように、従来ですと緑色のですね、全面的に隣近所よく付き合いの方がいいというふうに考えている人が多かったわけですが、今ではそうした方が減って、逆に形式な付き合いでいいんだという人が増えてきていると。ひっくり返っているんですね、順位が。こういうような傾向が出てきています。

【アメリカのボランティア・NPO活動】

海外の状況をもう一度見てみますと、アメリカだとかですと、ボランティアだとかNPOがどんどん発達してきました。その理由がですね、いくつかあります。アメリカの場合は、新しい国です。ヨーロッパの古い大陸から抜けだしてきて、新しい国を作ろうと頑張ったわけですね。ですから、新しい国づくりの中で、ヨーロッパ社会の様な宗教だとかというものは無縁な世界を作ろうと、人権というものを基軸にして、一人ひとりが大切にされる社会を作ろうと、そういう理想に燃えたわけです。ですから、宗教慈善団体とかのウエイトは非常に高

いものがありますけれども、ただそういうものに頼らないですね、ボランティア、NPOの活動というのにも相当に発達してきた。

さらに大きな政府を嫌うわけですね。今、オバマ大統領が苦しんでいるのは、ティーパーティーという、やや過激なという風に報道されていますけれども、やや急進的な思想を持たれた方々が多い、そういう団体であります。ティーパーティーという言葉の由来は、ボストンで茶会事件を起こしたところからですが、イギリスの植民地主義に反対をして抵抗運動をしたというのが、そのティーパーティーです。

ですから、伝統的に政府に対して不信感があるんですね。だから政府が大きくなるんだったら、自分たちがやった方がいい、自分らで支えるからという、西部劇を思い出しただけならばそうではありますが、自分たちで保安官を雇ったりしてですね、やると。そういう世界であります

ですから、ボランティアとかNPO活動の方に傾斜をしてきているということなんです。右下の方にございますけれども、アメリカの国民所得の中でNPOがGDPに占める割合が実に7%になっている。ですから、連邦政府だとか州政府だとかそういった政府の半分ぐらいはですね、NPOがGDPに寄与するくらい、活動が盛んだということです。

日本はアメリカの120万団体に比べて4万団体しかないわけですから、いかに外国は市民活動がなお盛んで、社会を支えるシステムになっているか、ということだと思います。日本も多かれ少なかれそっちの方に向かっていくと思います。

【県内民生児童委員の取組み事例～主任児童委員を中心とした子育てサークル活動～】

地域の中の状況を見ると、その意味でいい兆しが現われてきているなと思います。

本当に身近な活動の中からですね、見られることでありまして、これからこの辺りの活動と関連付けてお話しさせていただければ。

これは遷僑のめだかサークルという活動を書かせていただいておりますけれども、これほどこの主任児童委員

にもだんだんと活動が広まってきておりますが、遷喬さんの場合ですと、第二木曜日を定例の活動日とされていて、そしてこのように色んな活動をやっている。

右下の方にありますが、末恒地区のうさちゃんサークルの会でございますが、こちらでもですね、木曜日を定例的にされるわけでありましてけれども、このクリスマス会も50人ぐらい集まったということで、大変にぎやかにやっておられるわけでありまして。

【県内民生児童委員の取組み事例～ひとり暮らし高齢者の集い～】

このような地域の中で、言わば草の根的にですね、支え合うような活動を活発にしていかないと、消えた高齢者問題ということにつながっていくわけです。

特に大切なのは一人暮らしの高齢者の孤立をどうやって防ぐのかということです。

美保南の皆さんはですね、地区の民生協の方で主体となって、架空詐欺だとかそういう被害防止を呼び掛けている。

また下の方にありますけれども吉岡地区のものですけれど、一人暮らし高齢者と愛の輪訪問協力員が一堂に会して交流し情報交換をすると、そういうような機会があるということでありまして。

こういう詐欺だとかそういうものも現実には起こっています。だんだんと巧妙になってくるんですね。最近では県内で流行っていると言ってはあれですけれども、我々の消費生活センターの方で相談状況をモニターしているんですけれども、へえと思うような。敵もさるものですね、今どき電話かけてきてオレオレって言う人はいないそうでありまして。

電話かけてきて、まずですね、今度アメリカがイラクから撤退するんですと。何のことかと思えますよね。イラクから撤退するとイラクの通貨のディナールが急激に上がってきますと。今、イラクのディナールを買っておくと必ず儲かる、ついてはイラクのディナールを買うために段取りしましょうと、多少手数料がかかりますが、と言うそうでありまして。そうして知らぬ間にどんどんとお金を取られていくと、そんなケースが続出していきます。これはイラクのケースなんです、イラクだけだと

思ったらいけないので、実はアフリカのケースもございまして。いろんな、まあ同じグループなんでしょうけれども、そうやって電話をかけてくると。

あるいは、これは出会い系サイトですね、出会い系サイトを悪用するんでありますが、この出会い系サイトに登録をする方がおられますね。その登録をされますとメールが来るそうです。私ちょっと詳しいシステムはよく分からないんですが、メールが来て、1000万あげると。こういうことでいい出会いがあったなと思われる方がいらっしゃるんでしょうね。そうすると1,000万払うためには手続きが要ると。そうしてお話がどんどん来て、気がついてみたらクレジットカードで払えないようになる。そんな様なケースがあります。

どんどん色んなパターンが増えてきておりましてですね。そういう情報なんかを、やっぱり一人暮らしの方、思わず応じてしまうこともありますから、そういう情報を持っていただくことは大切だなあとと思います。

【県内民生児童委員の取組み事例～民生委員・児童委員発災害時一人も見逃さない運動～】

それから、安全安心のことにつきましては、特に防災ですね。右上の方の醇風地区には県の方でも支援しながら進めてきたわけです。要援護者の避難対策をやるなどして、いわば防災の地域団体を作ったりして。その際に民生委員の皆さんが、要援護者の避難訓練の実施にあたりたりされておられます。

また河原町の場合ですと、これは3年前、平成19年ごろから始められたわけでありましてけれども、一人も見逃さないという運動をしているわけでありまして、情報を共有したり、関係機関と連携して活動するというのを始められています。

また右下の方の面影地区では、災害地震の際のマニュアルを作ったりされてましてですね。例えば3日間、大切な時期なんで、その間に自分のことをしっかりやりながら支援活動もやっていくとかですね、それから連絡体制をどうしようとか、そういうようなマニュアルを作成されていらっしゃいます。

【県内民生児童委員の取組み事例～牛の世話を通じた

命の教育、職位区を取組～】

鳥取市内に止どまらず、色々と面白い活動が県内にあります。鳥飼さんという倉吉関金地区の主任児童委員であります。

よく見ると左上の方、牛が写っています。この鳥飼さんは、平成19年に和牛博覧会ありましたけれども、共進会の時に選手宣誓をされた方でありまして、非常に活発に和牛の繁殖だとか肥育だとかをされています。

同時にこういう主任児童委員としての活動もされておりまして、やはり命の大切さを子どもたちにしっかり教えたいということを実践されているんですね。

それで、牛の世話をさせる。これはもちろんただのお手伝いという意味ではなくて、体験的なやり方でありまして、体験してもらおうと。それから子どもが生まれるわけです。当然ながらこうした繁殖農家ですから、まあ年がら年中というわけではないですけど、年に何頭かは課習う生まれるわけでありまして。そういう命が誕生する瞬間というのを見てもらう。

さらに、これはドナドナの世界かもしれませんが、牛の出荷されるというのをですね、これも敢えて見てもらうと。そういう命をいただきながら自分たちは生きているんだと、だからこそ自分の人生というのをですね、小さいながらも思いを持って大切に生きてもらいたいと、こういうことになるわけでありまして、そういう活動をされている仲間です。

【地域福祉の取組例～地域通貨「城」を活用した地域福祉～】

これは鳥取市市内ですけれども、愛城でございますけれども。地域通貨、エコ通貨から始まったアイデアだと思いますが、手伝いをする、手伝ってもらう、それで1枚100円分の30分サービスをするというようなやり方をしておられます。

城北地区の場合はこれ以外にも本当に普段から公民館活動を熱心にされておりまして、お年寄りのための健康づくりというような活動をされているわけでありまして。

このような地域の連帯を持ち上げていくことを、是非鳥取市の市内から起こしていただきたいなと思います。

【地域福祉の取組例～支え合いコーディネーターの活動～】

支え合いコーディネーターという事業がございまして、地域のリーダーを育成するようになりました。



この結果としていくつかの事業が生まれていますが、倉吉市の場合ですと、これは長谷川さんのケースでありますけれども、公民館と共同してですね、そして推進会議を実施して色んな集いをやる。公民館で毎月1回健康教室ですとか、蕎麦うちだとか、防災だとか、そういうことをやる。

人間の脳の働きからしますと、コミュニケーションをとるだとか、とても大切なことでありまして、これは認知症の防止だとかに役に立つということがこれは実証されています。

そうやって色んな機会を作ってですね、集まってもらおう、出てきてもらうと。家の中に引きこもっている状態でない高齢者になっていただこうと、こういうコンセプトなんでありまして。

もちろん出てきていただければ、当然ながら年月を重ねて経験豊富な高齢者の方ですから色々な知恵もありますし、あるいは色んな能力もあるわけですし、文化活動だとか、健康づくりだとか、そうしたことにぜひとも参加していただけるし、それだけの十分な能力も当然あるわけでありまして、一生元気な高齢者活動を支えていこうと、そういうことであります。

北栄の山田さんのところは自分の家を開放されまして、「ふれあいサロンやまだ」という名前で地域の憩いの場にしています。そこでボランティア活動のようなことをしたりですね、それから、フラダンスなんかもあったり

したと思いますが、そうした様々な活動をその場でやっておられます。

本当に多くの地域の方々が集まっています。山田さんの場合は、そういう高齢者というのはむしろ“創年”だと、これから創り出す年齢なんだと、そういう発想で地域の皆さんと一緒に、こうした活動を行っていきこうということでもあります。

こういう輪がどんどん広がってくると、とてもじゃないけど消えた高齢者だということにはなっていないと思います。

【地域福祉の取組例～スーパーボランティア～】

県で力を入れております、こうした鳥取力とでも言うべきものを育てていきこうと。

スーパーボランティア事業というものを始めています。大栄生涯学習まちづくり研究会だとか、蒲生川のケースがここにございますけれども。

県の道路だとか河川だとかそうした公共施設を、丸ごと地域の方に委託して、年間20万だとか、委託料を払う。その代り全部しっかりやってくださいねと。

その代り地域で色々なイベントやってもらって結構です。下にありますがでも高校生が公衆トイレに絵を描くという図がございますけれども、何でも好きなようにやってもらったらいいい、そういうことで地域が元気になればいい、ということを始めただけであります。

今、だんだんと増えています。米子市でも、例えば皆生通りですとかね、けやき通りとかいうところでもスーパーボランティア始まっています。

【地域福祉の取組例～防災対策～】

それから防災対策、鳥取県では民生児童委員の皆さんと一緒に、災害時の要援護者避難支援を是非進めようとしています。

10月3日の午後1時半、今から10年前鳥取県西部地震がありました。その結果141名の方がケガをされましたし、1万7千棟の家屋が、全壊、半壊、一部損壊という家屋被害に遭いました。しかし、一人として亡くなられた方がいなかったというのは、私はこの地区の誇りだと思います。

特に神戸の場合ですと、どこに誰が住んでいるのか分からないと、だから助けようがなくて命を落としてしまったというケースが在るわけですが、鳥取県の場合はお互いに支え合い、声をかけあい、支え合ってやっていったわけですね。

例えば境港市の方では、米川地区だったと思いますけれども、地域の防災会の皆さんが、地域の要援護者と言われるような方を全部回るわけです。そしてみんな大丈夫だということを確認して、すぐに報告をとりまとめたり。また避難しやすい場所にとりあえずみんなで集まって、それから避難所に行くとか、地域で炊き出しをすとか、随分地域の支え合いが機能したわけでありまして。今それを見習おうということで、日野町の黒坂地区ですとか、そうした運動を始めておられます。

【地域福祉の取組例】

また防災だけでなく福祉もそうでありまして、全国で初めて、あいサポート運動というのを始めました。これは障がい者の方に、みんなで助け合っていこうということでもあります。まだ1年も経っていないんですが、既に2万人がこれに加盟をしましてし、支援企業や団体も45団体になりました。中には県外での参加も出てきはじめております。

このあいサポート事業を始めたら、ある時障害者バスケットボールの方々が来られまして、我々だってバスケットボールをやるくらい元気なんだから、他の障がい者を助けるって言うんですね。そして、あいサポート運動に加わっていただいたわけでありまして。

こうして地域で支え合いの輪を広げていくということを目指しております。

【地域福祉の取組例～とっとり子育て隊～】



このたびはですね、9月にとっとり子育て隊が発足をしました。そして鳥取県自体が子育て王国であるということを宣言したわけであります。

来年度からは市町村と協力しながら小学校、中学校のレベルまで医療費の助成事業を広げようと、全国のトップレベルになることになりました。今、このような取組をすすめております。

このとっとり子育て隊は地域の中で、例えば見守り活動をするとか、あるいは子育てサークルとして子育て世代を支えていくとか、アドバイスをするとか、そうした色んな活動を掘り起こしていこうと、それに地域で認証をして子育て隊によって地域みんなで子育てができる、そういう社会に変えていこうということであります。

【民生委員・児童委員の活動方向】

こうした様々な活動の中心に立つのが民生委員・児童委員の皆さまでありまして、ぜひとも一緒になって連携してやっていこうというような決意であります。

【住民協働により紡がれる新たな絆～鳥取県のボランティア活動参加率は全国1位～】

鳥取県もこういうユニークな地域の人づくり、そして地域づくりが始まりました。よく最近使っている図なんですけど、鳥取県は実に34.5%の人が何らかのボランティア活動に参加すると、全国でもNo.1なんです。No.2がどこかよく見ると島根県だったりするんですけど。やっぱりそうかなあ、と。下の方は大阪とか東京都とかですね。山陰は人がいいということがございますが。

【住民協働により紡がれる新たな絆～県内で進む様々なボランティア活動／鳥取砂丘ボランティア～】

こういうことを生かしていけば、絶対に暮らしやすい町になるだろうと。だからボランティア活動としてもですね、例えば砂丘の清掃ボランティア、例年3千人あまり参加していただいていますし、ゴミ拾いも入れますと1万人という規模のボランティアが、年間出るようになってきました。従来では考えられない位、この輪が広がってきています。

【住民協働により紡がれる新たな絆～県内で進む様々なボランティア活動／大山汚泥キャリーダウン～】

大山の方もそうですけれども、これは大山のキャリーダウンという、大山の汚泥を持って降りるということです。県営のトイレが頂上にあるんです。これは自然で動かしていますので、酵素分解をするようにしていますね、エコなトイレであります。

そういうトイレなのですが、汚泥がどうしても残って溜まってくる。これをどうしたらいいかってみんなで議論をしたんですけども、ヘリコプター飛ばして取りに行くとか生態系が壊れてしまう。持って降りるしかないということになりました。

でも県職員だけで持って降りるのは無理だわなあ、と。じゃあ、ボランティアを募集してみようか、ということで、募集したらですね、初年度450人集まりました。2年度も450人くらい集まったんですね。

今年は300人参加していただきましたが、これ、実は人数を限りました。もうトイレが空になりそうですし。空になるとこれは困るんですね。実は中で酵素が生きているんですね。分解するものですから、何ぼかないと、トイレが機能しなくなりますので。

で、今年は300人ということなんですけども、本当に皆さん清々しい感覚で降りて行ったんですね。こういうことでもあります。

【住民協働により紡がれる新たな絆～中山間集落見守り活動～】

それから先ほど申しました地域で見守り活動を、企業さんとやろうということを始めました。第1号は日本海

新聞さんだったんですけども、今では32の事業者が加わってきていただいています。

これ、みのもんたさんに褒められました。消えた高齢者問題の議論が盛んだった時に、鳥取県は一人もそういう消えた高齢者がいなかった、と。

その裏にはですね、この右側にありますけれども、あいきょうという安達商事さんという会社のものですが、走るコンビニエンスストアです。それで、中山間地だとお年寄りとかなかなか車でよう買いにいけない人が多いものですから、こちらから行商して歩くと。

そうすると、その時に何か異変があると気が付くわけですね。あのおばあちゃん最近出てこんな、と。ちょっとのぞきに行くと中で動けなくなっていたと。それを通報しまして助けたというようなケースが出たりですね。

そういうことで見守り活動を企業さんが実際にやっていく。こういう先進的な活動を鳥取県では素晴らしくやっていますねと。あまり人を褒めないみのもんたさんが褒めてくれていますね、喜んだわけですが。そういうような活動です。

【住民協働により紡がれる新たな絆～鳥取力創造運動～】

さらに鳥取力創造運動として、住民主体で、例えば用瀬で古民家を活かしてパフォーマンスをやるとか、この近くのスペースCOMODOさんとかですね、そうした住民の皆さんの運動が高まっています。

県も先進的なものには100万円、それからスターと型、まずはやってみようというものには10万円の助成をしようということで、基金を活用しまして事業を始めました。非常に応募も多くて、だいぶ鳥取の力が育ちつつあるなと感じます。

【住民協働により紡がれる新たな絆～とっとり共生の里～】

そして、共生の里という、農村を救うため、中山間地の荒廃を防ぐために、企業にも参画をしてもらうようになりました。

【住民協働により紡がれる新たな絆～とっとり共生の森～】

これより先行して進んでいましたのが、共生の森という仕組でございまして、これは実に14社が参加していただいております。

さらにJ-VERというですね、CO2の吸収源、これを企業さんがお金で買ってもらおうということで、森を育てていこうというものまで展開しております、この度山崎製パンさんが買って来て。ですから山崎パンの大山乳業関連の商品を買っていただきますと、この週末からはトリピーがついていまして、これは森づくりに役立ちますと書いてあります。1個あたり1円ですね、そうしたお金に中てるというコンセプトで山崎パンさんが協力するというようなことを始めたわけです。

【終わりに】

このように色んな形で地域の中からもう一度支え合う、そういう時代をつくりだす必要があると思いますし、その資格は鳥取県には十分あると思います。

全国の中でも先進的な取組は、民生児童委員さんの活動を含めまして、本当に出てきているなと思いますが、もっと皆さまの方でお力をいただければありがたいなと思います。

今回の議会でもだいたい議論をしました。民生児童委員さんの活動をもっとやりやすくするよう、市町村ともよく相談していこうというような議論をいたしました。

例えば情報管理の問題ですね、これも厄介です。個人情報法ですとか、個人情報保護条例だとか色んな仕組みができあがってきているわけですけども、だからといって住民の生活とか命が脅かされていいものでもありません。その辺の折り合いをどうやって上手につけていくのかですね、もっと現場の市町村をまきこんでまずは議論していこうと、民生児童委員さんの活動環境を整えていくように使用じゃないか、こんな議論をさせていただいたところでもあります。

この度100周年を迎えたのが、盲学校だとか聾学校とかでございますけれども、この盲聾学校ただしの設立が100年前です。遠藤ただし董先生が、設立されました。「視聴は只真心をもってす」という風に先生は述べられている

わけであります。見たり聞いたりするという事は、真心を持ってすれば、それは自ずから道は開けると、こういふことでもあります。そういう気持ちですね、コミュニケーションをしっかりとれる世の中にしていく必要があります。

昨日、今日と大変な興奮が世界中を駆け巡っているわけですが、チリで落盤事故がありまして、33人が取り残されたということがありました。幸い救助され、今引き上げ作業ということになっています。一人一人ですね、いま地中から蘇るように帰ってきています。その様子を見て世界中が熱狂で湧いているわけですが、人の輪の大切さだとか、助け合うことの大切さ、それを今世界中の人たちが共有しているように思います。

実はチリという国は今未曾有の国難の中にありまして、マグニチュード8.8の大地震がありまして、コミュニティが崩壊をしてるんですね。震源に近いところではお互いに鉄砲を持って監視しあうというぐらい、信頼感が失われていた時にこの事故がおきました。そして地中から出てきた作業員が、大きな声で仲間呼びかけました。チリチリチリというふうに呼びかけていました。チリの炭鉱労働者万歳と、やるわけなんです。そうしてみんなで支え合いながら、この生還を得た喜びを共有することでもあります。これにチリの国民が持っている心を捉えられたと思います。私たちが失いつつあった人々の絆というものをもう一度蘇らせなければならないと思いました。チリのあの事件が語っているように、そうした崇高な運動を起していくのが今日お集まりの民生児童委員のみなさんの力にかかっていると思います。

是非ともこの研修会を通じまして、実り多い民生児童委員様の活動が進みますように、そして何より、激務でございますので、皆さまが健やかにお過ごしになりますよう、心からお祈り申し上げまして、私からのメッセージとさせていただきます。どうもありがとうございました。